

# ラプンツェル

グリム

中島孤島訳

青空文庫



むかしむかし夫婦者があつて、永い間、小児が欲しい、欲しい、といひ暮しておりましたが、やつとおかみさんの望みがかなつて、神様が願いをきいてくださいました。この夫婦の家の後方には、小さな窓があつて、その直ぐ向うに、美しい花や野菜を一面に作つた、きれいな庭がみえるが、庭の周囲には高い塀が建てまわ廻されているばかりでなく、その持主は、恐ろしい力があつて、世間から怖がられている一人の魔女でしたから、誰一人、中へはいらうという者はありませんでした。

或る日のこと、おかみさんがこの窓の所へ立つて、庭を眺めて居ると、ふと美しいラプンツェル（菜の一種、我邦の萵苣（チシ

ヤ)に当る。)の生え揃った苗床が眼につきました。おかみさんはあんな青々した、新しい菜を食べたら、どんなに旨いだろうと思つと、もうそれが食べたたくつて、食べたたくつて、たまらない程になりました。それから、毎日毎日、菜の事ばかり考えていたが、いくら欲しがつても、迎も食べられないと思つと、それが元で、病氣になつて、日増に痩せて、青くなつて行きます。これを見て、夫はびっくりして、尋ねました。

「お前は、まア、何うしたんだえ？」

「ああ！」とおかみさんが答えた。「家の後方の庭にラプンツェルが作つてあるのよ、あれを食べないと、あたし死んでしまふわ！」

男はおかみさんを可愛がつて居たので、心の中で、

「妻を死なせるくらいなら、まあ、どうなつてもいいや、その菜を取つて来てやろうよ。」

と思ひ、夜にまぎれて、塀を乗り越えて、魔法つかいの庭へ入り、大急ぎで、菜を一つかみ抜いて来て、おかみさんに渡すと、おかみさんはそれでサラダをこしらえて、旨そうに食べました。けれどもそのサラダの味が、どうしても忘れられない程、旨かつたので、翌日になると、前よりも余計に食べたくなって、それを食べなくては、寝られないくらいでしたから、男は、もう一度、取りに行かなくてはならない事になりました。

そこで又、日が暮れてから、取りに行きましたが、塀をおりて見ると、魔法つかいの女が、直ぐ目の前に立って居たので、男は

ぎよつとして、その場へ立ちすくんでしまいました。すると魔女が、恐ろしい目つきで、睨みつけながら、こう言いました。

「何だって、お前は扉を乗り越えて来て、盗賊のように、私のラプンツエルを取って行くのだ？ そんなことをすれば、善いことは無いぞ。」

「ああ！ どうぞ勘弁して下さい！」と男が答えた。「好き好んで致した訳ではございません。全くせつぱつまって余儀なく致しましたのです。妻が窓から、あなた様のラプンツエルをのぞきまして、食べたい、食べたいと思いつめて、死ぬくらいになりましたのです。」

それを聞くと、魔女はいくらか機嫌をなおして、こう言いまし

た。

「お前の言まへうのが本ほん当とうなら、ここにあるラプンツエルを、お前まへのほしまへいだけ、持もたしてあげるよ。だが、それには、お前まへのおかみさんが産うみ落おとした小兒こどもを、わたしにくれる約やく束そくをしなくちやいけない。小兒こどもは幸しあ福わせになるよ。私わたしが母親ははおやのように世話せわをしてやります。」

男おとこは心しん配ぱいに気きをとられて、言いわれる通とおりに約やく束そくしてしまつた。で、おかみさんがいよいよお産さんをすると、魔女まじよが来きて、その子こに「ラプンツエル」という名なをつけて、連つれて行いってしまいました。

ラプンツエルは、世せ界かいに二ふ人たりと無ないくらいの美うしつくい少女むすめになり

ました。少女が十二歳になると、魔女は或る森の中にある塔の中へ、少女を閉籠めてしまった。その塔は、梯子も無ければ、出口も無く、ただ頂上に、小さな窓が一つあるぎりでした。魔女が入ろうと思う時には、塔の下へ立って、大きな声でこう言うのです。

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！

お前の頭髪を下げてください！」

ラプンツエルは黄金を伸ばしたような、長い、美しい、頭髪を持って居ました。魔女の声が聞こえると、少女は直ぐに自分の編んだ髪を解いて、窓の折釘へ巻きつけて、四十尺も下まで垂らします。すると魔女はこの髪へ捕まって登って来るのです。



一三年経つて、或る時、この国の王子が、この森の中を、馬で  
 通つて、この塔の下まで来たことがありました。すると塔の中か  
 ら、何とも言いようのない、美しい歌が聞こえて来たので、王子  
 はじつと立停まつて、聞いていました。それはラプンツェルが、  
 退屈凌ぎに、かわいらしい声で歌つていたのでした。王子は上  
 へ昇つて見たいと思つて、塔の入口を捜したが、いくら捜して  
 も、見つからないので、そのまま帰つて行きました。けれどもそ  
 の時聞いた歌が、心の底まで泌み込んで居たので、それから、  
 毎日、歌をききに、森へ出かけて行きました。  
 或る日、王子は又森へ行つて、木のうしろに立つて居ると、魔  
 女が来て、こう言いました。

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！」

お前の頭髪を下げておくれ！」

それを聞いて、ラプンツエルが編んだ頭髪を下へ垂らすと、魔女はそれに捕まって、登って行きました。

これを見た王子は、心の中で、「あれが梯子になって、人が登って行かれるなら、おれも一つ運試しをやつて見よう」と思つて、その翌日、日が暮れかかった頃に、塔の下へ行つて

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！」

お前の頭髪を下げておくれ！」

というと、上から頭髪がさがつて来たので、王子は登って行きました。

ラプンツエルは、まだ一度も、男というものを見たことがなかつたので、今王子が入つて来たのを見ると、初めは大変に驚きました。けれども王子は優しく話しかけて、一度聞いた歌が、深く心に泌み込んで、顔を見るまでは、どうしても気が安まらなかつたことを話したので、ラプンツエルもやつと安心しました。それから王子が妻になつてくれないかと言い出すと、少女は王子の若くつて、美しいのを見て、心の中で、

「あのゴテルのお婆さんよりは、この人の方がよっぽどあたしをかわいがつてくれそうだ。」

と思ひましたので、はい、といつて、手を握らせました。少女はまた

「あたし、あなたとご一しよに行きたいんだが、わたしには、どうして降りたらいいかわからないの。あなたがお出になるたんびに、絹紐を一本宛持つて来て下さい、ね、あたしそれで梯子を編んで、それが出来上ったら、下へ降りますから、馬へ乗せて、連れてつて頂戴。」

「いいました。それから又、魔女の来るのは、大抵日中だから、二人はいつも、日が暮れてから、逢うことに約束を定めました。ですから、魔女は少しも気がつかずに居ましたが、或る日、ラプンツェルは、うっかり魔女に向つて、こう言いました。

「ねえ、ゴテルのお婆さん、何うしてあんたの方が、あの若様より、引上げるのに骨が折れるんでしょうね。若様は、ちよい

との間に、登つていらつしやるのに！」

「まあ、この罰当りが！」と魔女が急に高い声を立てた。「何

だつて？ 私はお前を世間から引離して置いたつもりだつたの

に、お前は私を瞞したんだね！」

こう言つて、魔女はラプンツェルの美しい髪を攫んで、左の手へ

ぐるぐると巻きつけ、右の手に剪刀を執つて、ジヨキリ、ジヨキ

リ、と切り取つて、その見事な辮髪を、床の上へ切落してし

まいました。そうして置いて、何の容赦もなく、この憐れな少

女を、砂漠の真中へ連れて行つて、悲みと嘆きの底へ沈めてし

まいりました。

ラプンツェルを連れて行つた同じ日の夕方、魔女はまた塔の

上へ引返して、切り取った少女の辮髪を、しっかりと窓の折釘へ結えつけて置き、王子が来て、

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！

お前の頭髪を下げておくれ！」

と言うと、それを下へ垂らしました。王子は登つて来たが、上には可愛いラプンツエルの代りに、魔女が、意地のわるい、恐ろしい眼で、睨んで居ました。

「あツは！」と魔女は嘲笑った。「お前は可愛い人を連れに来たのだろうが、あの綺麗な鳥は、もう巢の中で、歌っては居ない。あれは猫が攫つてしまったよ。今度は、お前の眼玉も搔るかもしれない。ラプンツエルはもうお前のものじゃア無い。お

前はもう、二度と、彼女にあうことはあるまいよ。―

こう言われたので、王子は余りの悲しさに、逆上させて、前後の考えもなく、塔の上から飛びました。幸いにも、生命には、別つじよう

状もなかったが、落ちた拍子に、茨へ引掛かって、眼を潰してしまいました。それからは、見えない眼で、森の中を探り廻り、木の根や草の実を食べて、ただ失くした妻のことを考えて、

泣いたり、嘆いたりするばかりでした。

王子はこういう憐れな有様で、数年の間、当もなく彷徨い歩いた後、とうとうラプンツェルが棄てられた沙漠までやって来ました。ラプンツェルは、その後、男と女の双生児を産んで、この沙漠の中に、悲しい日を送って居たのです。王子は、ここまで

来ると、どこからか、聞いたことのある声こえが耳みみに入はいつたので、声こえのする方ほうへ進すすんで行くと、ラプンツエルが直すぐに王子おうじを認みとめて、いきなり頸くびへ抱だきつ着いて、泣なきました。そしてその涙なみだが、王子おうじの眼めへ入ると、忽たちまち両方りょうほうの眼めが明あいて、前まえの通とおり、よく見えるよみうになりました。

そこで王子おうじは、ラプンツエルを連つれて、国くにへ帰かえりましたが、国くにの人々ひとびとは、大たい変へんな歡喜よろこびで、この二人ふたりを迎むかえました。その後ごふたりは、永ながい間あいだ、睦むつまじく、幸こう福ふくに、暮くらしました。

それにしても、あの年寄としよつた魔女まじよは、どうなつたでしょう？  
それは誰たれも知しつた者ものはありません。







# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集」富山房

1938（昭和13）年12月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年3月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# ラプンツェル グリム

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫  
著者 中島孤島訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>